

# 「古事記」の成立と「序」の謎を解明する

文体や内容や歴史状況の検証から

## 三浦佑之氏

千葉大学教授・文学部長

### 「口語訳」がベストセラー 語られる物語の楽しさを一般に

地味な古典の世界ながらベストセラーとなった『口語訳古事記』。文庫化で『——(神代篇)』『——(人代篇)』に分冊され、その後、『古事記講義』『古事記を旅する』が加わって、『古事記三部作』が出揃った。さらに、『史書の謎を解く』『古事記のひみつ』が続く。古代文学・伝承文学の専門家はいまや一般には、『古事記の三浦』として名が通っている。

『口語訳——』については「恋あり戦いあり。悲劇的だったり、クスツと笑わせたり。『古事記』には楽しさ、面白さ、構成の巧みさなど、語り部の語る物語としての条件が揃っています。こんなにも興味深い古典を知らずにいるのはもったいない。色は付けずに、純粹に楽しんでもらいたい」

だが一般向けとは別のところで、『古事記』という史書の成立に関する新たな説も表明し、問題提起を続けてきた。

学界で議論を呼んだのは、

『古事記』の「序」(太朝臣安万侶によるいわば上表文)に疑念をはさんだ論説だ。『序』は後から書き加えたもの。それは『古事記』が成立したといわれる八世紀初頭より百年後、九世紀の初めとみるのが妥当である」

「序」の内容は様々な矛盾を抱え込んでいるという。そもそも、『日本書紀』天武十年紀によると、史書編纂を命じた同時期に律令選定の詔も出ているわけで、国家定立のため『車の両輪』のごとく史書と法律の整備に取りかかっていたときに、『書紀』とは別の史書編纂を志向するのは、これまでの学者による様々な説明を念頭においてもやはり疑問だ、というのだ。

論の柱を拾うと——。「古事記」の本質的な性格や文体は、国家的な歴史書とは別の「語り」である。内容や仮名遣いからみて、すでに七世紀に書かれたものである。しかし「序」は太(オオノ)安万侶と同族の多(オオノ)朝臣人長(古事記)序を引用した序を持つ「弘仁私記」の作者)の周辺が新たに加筆したものである。「序」が必要になった訳は、「古事記」の権威づけが必要に

なったから——等々だ。「九世紀以降、祭祀に関わってきた氏族らによる文書や歴史書が次々と出現する。このとき、太(多)氏らの伝えてきた『古事記』の掘り起こしもなされたと捉えるのが自然なのです」

筑紫、越(こし)、そして『書紀』には出てこない出雲の神話……。「古事記」の背後に仄見える古代日本における権力対立の構造にも着目する。「神話や歴史物語は、まったく根も葉もないことではない。時代・社会背景、人々の生活が何らかのかたちで反映している。それを想像し、組み立て、古代のメッセージとして読み取っていく。その辺りが僕たちの仕事でしょうね」

「古事記」に「語り」の論理を合わせる立場から、国家権力の外側を巡り歩き、神話や歴史を語り歩いた人々の民俗にも焦点を当てたいという。

